

〔展 望〕

愛着表象の複数性と変容

筑波大学心理学研究科：新川 貴紀

筑波大学心理学系：桜井 茂男

Multiplicity and Change in Attachment Representation

Takanori Shinkawa and Shigeo Sakurai

問題と目的

子ども時代の対人関係、特に発達初期の親子関係が後の個人の対人関係に多大な影響を与えるという考えは、精神分析学理論の基礎をなす考えである（遠藤，1992）。そして、現在においても、子どもの発達における親の影響を明らかにすることが発達心理学の重要なテーマの一つになっている。

本論文では Bowlby(1969, 1973, 1980)による愛着理論を取り上げ、愛着対象との相互作用を通して形成される“内的表象（内的作業モデル）”が個人にどのような影響を与えるかを概観する。また、不安定型の内的作業モデルを持った個人が、安定型に変容するために必要な要因を明らかにすることは発達臨床的視点から重要であると考えられる。そこで本研究では内的作業モデルの複数性やモデルの変容を扱った研究についても概観する。

愛着と内的作業モデル

Bowlby(1969, 1973, 1980)は、子どもが愛着対象との具体的な経験を通して、愛着対象への近接可能性、愛着対象の情緒的応答性等に関する主観的な確信、表象を有すると考え、この表象を“内的作業モデル”とした。すなわち、内的作業モデルは、愛着の客観的な実像を反映したものというよりは、愛着対象に子どもが取った行動、あるいは取ろうと意図した行動に対して、愛着対象がどう反応したかという歴史の反

映である。

こうした愛着関係における主観的経験の力動的体制化は、愛着対象あるいは世界に関するモデルの形成のみならず、自己に関するモデルの形成としても相補的な形で進行していく。母親が支持的で応答的である時、子どもは母親を良いもの“安定した（secure）”ものとして内在化し、さらにそれに応じて自分を価値ある存在、愛され、助けられるに値する存在と表象するようになる。一方、母親が非応答的、拒絶的であるような時、子どもは母親を悪いもの、“不安定な（insecure）”ものとして内在化し、それに応じて自分が愛され助けられるに値しない存在であるという表象を作り上げてしまう。

Bowlby(1973)自身の記述に従うならば、愛着対象や世界の作業モデルの中核をなすのは、その愛着対象が誰でありどこに存在し、また愛着対象からどのような応答が期待できるかの主観的な考えである。同様に、自己の作業モデルの中核をなすのは、自分自身が愛着対象にどのように受容されているか、あるいは受容されていないかについての主観的な考えである。

内的作業モデルはどのように働くか

Bowlby(1988)は幼児期や児童初期に焦点を当てているが、青年期の愛着経過の重要性も認識し、愛着システムの基本的機能が人生を通して働くことを指摘している。

青年を対象とした内的作業モデルの実証研究として、Hazan & Shaver(1987)は、乳幼児の

愛着行動に対応した成人の対人スタイル（安定、アンビバレント、回避）を分類する質問紙を完成している。これに基づく日本語版質問紙が詫摩・戸田（1988）によって作成されており、久保田（1995）は、この質問紙で測った対人スタイルと、過去から現在における母親との関係に関する認識とに特定の対応を見出している。例えば、現在の対人スタイルでのアンビバレント特性は、子どもの頃の母親との関係の愛着因子と負の相関を示し、不信、過剰適応、分離不安因子とは正の相関を示した。このように、成人の対人スタイルは乳児の愛着スタイルと対応することが認められ、個人内に内在化された心的ルールとしての内的作業モデルの働きが部分的に実証されている。

最近では Mikulincer (1995) が愛着スタイルと自己や他者に対する知覚の関連は、愛着に関連した情動を調整する行動方略の反映であると指摘している。また、愛着理論では内的作業モデルは他者との経験の内在化だけではなく、認知や感情や行動を調整する一連のルールとされ (Collins & Read, 1990; Shaver et al., 1996), 安定型の人より高いセルフエスティームを示すこと (Bartholomew & Horowitz, 1991; Collins & Read, 1990; Feeney & Noller, 1990; Griffin & Bartholomew, 1994; Mikulincer, 1995), 回避型の人より安定型の人とくらべて自己を否定的に見る傾向があること (Feeney & Noller, 1990) などが明らかにされている。また、拒否型の人より安定型の人と比べてストレスに対処するためのサポートを求めることが少なく (Mikulincer & Florian, 1995; Mikulincer, Florian & Weller, 1993; Ognibene & Collins, 1998), 内的作業モデルは目標の達成や衝動やストレスに対応するときに方向付けをおこなう調整方略と一致するものと思われる。

内的作業モデルは単一か

内的作業モデルとは主たる養育者との相互作用によってのみ形成されるものなのだろうか。このような内的作業モデルの単一性、複数性に

関する議論は Bowlby (1980) や Leiderman (1989) などによって行われている。Bowlby (1980) や Main (1991) は、基本的に、単一の内的整合性の高いモデルが個人内に存在することが、内的作業モデルのあり方としては健全であり、複数の（整合一貫しない）モデルが存在するとき、そうした状態にある個人は不適応に陥る確率が高くなるとしている。しかし、その一方で、Leiderman (1989) のように、関係特異的なモデルを複数有することで、むしろ、個人の社会的適応性が增大すると把握する研究者もいる。もっとも、Bowlby や Main が問題にするモデルの複数性とは、あくまでも主要な愛着対象（母親）との関係に対して整合一貫しない複数のモデルが存在すること（一つの関係に複数のモデル）であり、Leiderman のようにさまざまな関係に対して関係特異的なモデルが存在するということを意味するものではない。

しかし、Bowlby や Main の仮定には主要な愛着対象との関係に関するモデルが、個人の中で絶対的な位置を占め、その後の多くの関係の基盤になるという暗黙の前提がある。その結果、彼らは主要な愛着対象に関するモデルが単一で、常に安定一貫した機能を果たしえるということの意味を強調する。一方、Leiderman は、後に愛着の障害や社会的不適応が生み出されるのは、子どもが早期に経験する全ての、あるいはほとんどの関係が不安定である場合であり、主要な愛着対象との関係が崩壊していたとしても、その他の複数内在化されたモデルのうちの少なくとも一つ、安定した内容のものが存在していれば、その後の愛着、対人関係様式は十分安定したものに発達し得ると考えている。

内的作業モデルが単一のものではなく、他の重要な人物との関係によっても内的表象が構成されるのならば、それはどのように個人に影響するのだろうか。Andersen ら (Andersen & Baum, 1994; Andersen & Cole, 1990; Andersen, Glassman, Chen & Cole, 1995; Andersen, Reznik, & Manzella, 1996) は内的作業モデルという語は使用していないが、重要な他者 (significant other) に関する表象について、精

神分析学における「転移」を情報処理モデルの観点から概念化し直し、対人関係全般に反映されるものとして捉えている。彼女は、「転移」は臨床場面で観察される病理的現象に限定されるわけではないと主張している。過去の対人経験が現在の対人関係に反映されるというのは、日常生活の中で他者と相互作用する場面において頻繁に起こるきわめて一般的な現象であると考えられるからである。Andersen の言う重要な他者とは、両親に限らず、きょうだい、親友、恋人、先生など、当人にとって重要な存在であれば誰でも含まれる。

Andersenの一連の研究 (Andersen & Baum, 1994; Andersen & Cole, 1990; Andersen, Glassman, Chen & Cole, 1995; Andersen, Reznik, & Manzella, 1996) では、被験者一人一人が持つ重要な他者の表象を調べ、それをもとに実験課題で提示される刺激人物が人工的に構成されている。まず、被験者の身近な存在の人から重要な人物とそうでない人物を具体的に挙げさせ、それらの人たちの特徴を記述させる。そして、そこで記述された特徴をさまざまに組み合わせ、重要な他者に類似している人物とそうでない人物を被験者ごとに設定するのである。このような個性記述的アプローチと法則定立的なアプローチを融合させた研究手法を用い、彼女は重要な他者の表象のもつ機能を次々と解明している。

例えば、Andersen and Cole (1990) は、虚再認パラダイムを用いた実験を行い、重要な他者の表象には所与の情報から新たな情報を生成し補充する機能があることを明らかにした。つまり、実際には提示されなかったディストラクターを誤って再認する傾向(虚再認)は、重要な他者に類似した人物条件でもっとも高くなるというのである。さらにこのような虚再認は、刺激人物の構成のために行う特徴列記課題を実験課題の2週間前に行った場合でも起こることが明らかにされている (Andersen, Glassman, Chen & Cole, 1995)。

しかも、重要な他者の表象は類似の人物に対する好悪の感情 (Andersen & Baum, 1994) や

相手に対して接近行動をとるか回避行動をとるかといった動機的側面や自分が相手に受容されるか拒否されるかといった対人期待の側面 (Andersen, Reznik, & Manzella, 1996) に関しても増幅効果のあることが見出されている。ここではネガティブな感情を持っている重要な他者 (ネガティブで重要な他者) についての特徴もあげてもらい、ポジティブで重要な他者の特徴やそれ以外の特徴を組み合わせ、好ましい特性と好ましくない特性を同数ずつ有する人物を作り出している。これらは、人には重要な他者との相互作用を通じて学習した対人様式を新たに出会った相手に適用する傾向があることを示唆している。

以上の結果から、養育者以外の表象も同様に感情や認知や動機づけに影響をしていることがわかる。

内的作業モデルは変容するか

最近では、人生を通して何が愛着スタイルを変化させるかということに関心をもつ研究が増えてきている (例えば、Baldwin & Feher, 1995; Davila, Burge, & Hammen, 1997; Scharfe & Bartholomew, 1994)。愛着スタイルの安定性を調べた縦断的研究では8ヵ月後の再テストで60%の一致率 (Scharfe & Bartholomew, 1994) を、4年後の再テストで70%の一致率 (Kirkpatrick & Hazan, 1994) を見出している。Baldwin and Feher (1995) はこれらの研究を概観し、約30%の人が何らかの時期に愛着スタイルを変化させていると指摘している。

Scharfe and Bartholomew (1994) は生活上の出来事、特に個人間での出来事が愛着スタイルを変化させると仮定したが、明確な結果は得られていない。一方、Davila, Burge, and Hammen (1997) は愛着スタイルの変化には個人差があり、環境の変化よりも愛着スタイルの安定性の方が強い人もいるし、簡単に変化しやすい人もいることを指摘し、このような安定性の要因は自己や他者への首尾一貫した見方を混乱させるような、初期の個人や家族の機能不全によるも

のであると仮定している。Davila, Karney, and Bradbury(1999)は個人差の要因だけではなく生活上の出来事などにおける文脈モデルや社会的認知モデルなどを提案し、それぞれが影響し合い愛着スタイルを変化させるとしている。

今後の課題

愛着スタイルがどのように個人の発達に関わってくるかという研究は非常に重要なものであると思われる。一連の研究において安定型の人は自分や他者をよりポジティブにみることに不安定型の人はよりネガティブにみることに明らかになっている。このようなことから、不安定型の愛着スタイルを持った子どもは対人関係などにおいて問題を持つ危険が大きいと予想される。不安定型の子どもがそのような問題を持ったときに親を含め家族のサポートは非常に重要である。Andersenらの一連の研究(Andersen & Baum, 1994; Andersen & Cole, 1990; Andersen, Glassman, Chen & Cole, 1995; Andersen, Reznik, & Manzella, 1996)にもみられるように、両親に限らず友人や恋人なども重要な他者として個人に非常に強い影響力をもつことがわかる。このような場合、不安定型の愛着スタイルを持った子どもが両親、友人、先生などによるソーシャルサポートや、さまざまな経験のなかで、どのようにそのスタイルを変容させていくかに注目することが非常に重要であると思われる。

引用文献

Andersen, S. M., & Baum, A. 1994 Transference in interpersonal relations: Inference and affect based on significant-others. *Journal of Personality*, **62**, 459-497.

Andersen, S. M., & Cole, S. W. 1990 "Do I know you?": The role of significant-others in general social perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 384-339.

Andersen, S. M., Glassman, N. S., Chen, S., & Cole, S. W. 1995 Transference in social perception: The role of chronic accessibility in significant-other representations in social relation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 41-57

Andersen, S., M., Reznik, I., & Manzella, L. M. 1996 Eliciting facial affect, motivation, and expectancies in transference: Significant-other representations in social relations. *Journal of Personality*, **71**, 1108-1129

Baldwin, M. W., & Feher, B. 1995 On the instability of attachment style ratings. *Personal Relationships*, **2**, 247-261.

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment style among young adults: A test of four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-224.

ボウルビィ J. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子(訳) 1976 親子関係の理論Ⅰ 愛着行動 岩崎学術出版社 (Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss: Vol. 1, Attachment*. New York: Basic Books.)

ボウルビィ J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳) 1977 親子関係の理論Ⅱ 分離不安 岩崎学術出版社 (Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss: Vol. 2, Separation*. New York: Basic Books.)

ボウルビィ J. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子(訳) 1981 親子関係の理論Ⅲ 対象喪失 岩崎学術出版社 (Bowlby, J. 1980 *Attachment and Loss: Vol. 3, Loss*. New York: Basic Books.)

Collins, N. L., & Read, S. J. 1990 Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 644-633.

Davila, J., Burge, D., & Hammen, C. 1997 Why does attachment style change? *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 826-838.

Davila, J., Karney, B. R., & Bradbury, T. N. 1999 Attachment change processes in the early years of marriage. *Journal of Personality and*

- Social Psychology*, **76**, 783-802.
- 遠藤利彦 1992 愛着と表象 愛着研究の最近の動向：内的作業モデルの概念とそれをめぐる実証的研究の概観 心理学評論, **35**, 201-233.
- Feeney, J. A., & Noller, P. 1990 Attachment style as a predictor of adult romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 1080-1091.
- Griffin, D., & Bartholomew, K. 1994 Models of self and other: Fundamental dimensions underlying measure of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 430-445.
- Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Kirkpatrick, L. A., & Hazan, C. 1994 Attachment styles and close relationships: A four-year prospective study. *Personal Relationships*, **1**, 123-142,
- 久保田まり 1995 アタッチメントの研究：内的ワーキングモデルの形成と発達 川島書店
- Leiderman, P. H. 1989 Relationship disturbances and development through the life cycle. In A. J. Sameroff & R. N. Emde (Eds.), *Relationship disturbance in early childhood* (pp. 165-190). New York: Basic Books.
- Main, M. 1991 Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) models of attachment: Findings Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle* (pp. 127-159). New York: Routledge.
- Mikulincer, M. 1995 Attachment style and the mental representation of the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 1203-1215.
- Mikulincer, M., & Florian, V. 1995 Appraisal of and coping with a real-life stressful situation: The contribution of attachment style. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 406-414.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Weller, A. 1993 Attachment style, coping strategies, and posttraumatic psychological distress: The impact of the gulf war in Israel. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 817-826.
- Ognibene, T. C., & Collins, N. L. 1998 Adult attachment style, perceived social support, and coping strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **15**, 323-345.
- Scharfe, E., & Bartholomew, K. 1994 Reliability and stability of adult attachment patterns. *Personal Relationships*, **1**, 23-43.
- Shaver P. R., Collins, N., & Clark, C. L. 1996 Attachment styles and internal working models of self and relationship partners. In G. J. O. Fletcher & J. Fitness (Eds.), *Knowledge structures in close relationships: A social psychological approach* (pp. 25-61). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 詫間武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.